

IV 高齢広葉樹林の萌芽更新技術の確立

(実施期間：平成 28 年度～32 年度 予算区分：単県課題 担当：西信介・谷口公教)

1 目的

里山林の放置による里山広葉樹林の高齢・大径化が進行しており、特にナラ類はナラ枯れ被害が増加する要因ともなっている。ナラ類等の広葉樹はシイタケ原木、床材、木炭等に利用されるほか、近年では木質バイオマス燃料としても注目が高い。

里山のナラ類等については、萌芽能力が高い 15～25 年生程度で伐採・萌芽更新させていたが、近年の高齢化した広葉樹林伐採跡地では、ヤブ化・ササ山化した山林もみられ、高齢・大径化に伴う萌芽能力の低下や不適切な伐採が原因と指摘する声があり、高齢広葉樹林の更新方法の確立が急務となっている。

2 実施概要

13～90 年生のコナラの伐採地で、伐採時期、樹齢、伐根の直径、伐採高、萌芽枝の発生位置、本数、樹高等の状況を調査した。その結果、90 年生の林分でも萌芽することを確認できたが、伐採時期により萌芽率が異なり、冬期に伐採した場合に萌芽率が高いことが分かった（図 1）。

萌芽が発生するのは、切株の中程の高さ（株中）からの場合が一番多く、次いで切株の地際付近（根元）で、伐採面に近い切株上部（株上）からの萌芽の発生は少なかった（図 2）。萌芽後、二成長期後の生存率は、切株の上より根元に近い方が生存率が高い傾向がみられた（図 3）。

3 結果の図表と研究の様子

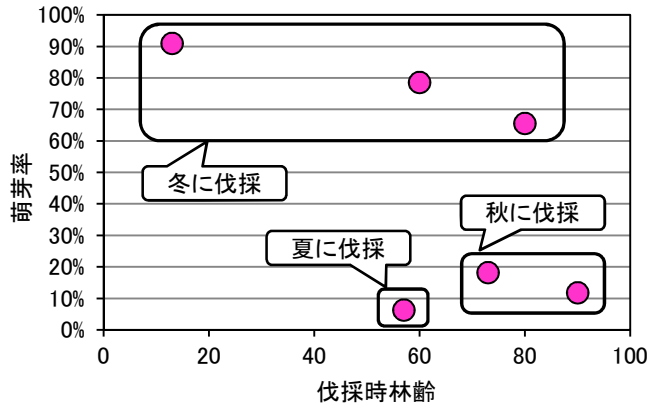


図 1 林齢と萌芽率の関係 (コナラ)



写真 85 年生コナラの萌芽調査

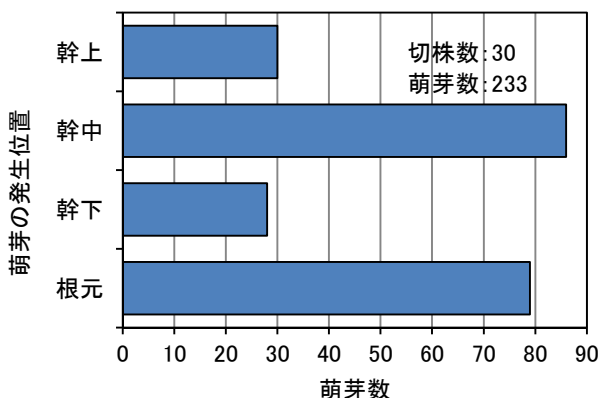


図 2 萌芽の発生位置と数

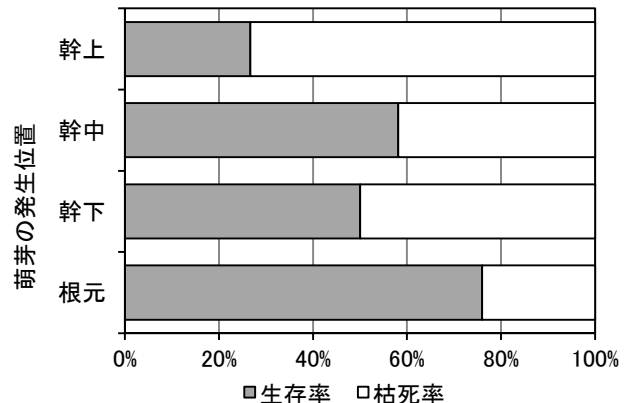


図 3 二成長期後の萌芽の生存率